

高等学校の美術教育における水墨画の教材研究

葉柳 津盛*・福田 隆眞

A Study on the Learning Material of Japanese Ink Painting in
High School Art Education

HAYANAGI Tsumori* and FUKUDA Takamasa
(Received January 12, 2007)

キーワード：高等学校 美術 水墨画 鑑賞 教材

はじめに

現行の高等学校の教育課程では、高等学校学習指導要領解説において、その改訂のねらいのひとつに、「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること^(註1)」と示しており、これを含めた四つのねらいに沿った、各教科・科目などの編成、単位数、内容の改善方針などが記されている。

そこで、筆者はこれまで高等学校美術科の授業において、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成することを目的とし、水墨画等、東洋・日本美術の内容で、鑑賞の授業を何度か実施してきた。生徒達の反応を通じて感じたことは、子供たちの大多数は日本画や水墨画などを実際に制作した経験が無く、これらについて馴染みが無いことによって、鑑賞の際、「難解なものである」との先入観から、その鑑賞、理解に苦慮しているように見受けられるということである。近年、高等学校生徒は、中学校までの段階で、水彩画、アクリル画、油彩画等、西洋絵画の材料・技法を用いた作品制作の体験は豊富であるが、中学校における美術科の授業時数減少等の影響もあり、特に東洋の美術についての制作体験をもつ生徒はきわめて少ないのが現状である。東洋美術の鑑賞に際し、水墨画の制作を体験することで、これらの作品理解がより深まると考えた。

ここでは水墨画の鑑賞を導入に、技法練習、制作、展示、生徒作品の相互鑑賞、そして額装したものを家庭に持ち帰り飾ることで、日常生活に美術作品を生かし、生涯にわたって美術を愛好する心情を育む、というプロセスをたどり、水墨画を教材とする授業を展開した。

1 伝統的表現方法の体験的理解

現行の高等学校学習指導要領解説芸術編音楽美術編第2章第4節において、「美術Ⅰ」の内容に関する記述の表現に関する解説には「日本画など日本の伝統的表現方法や現代の

* 広島山陽学園山陽高等学校教諭

多様な表現様式・表現方法、材料や用具について体験的に理解するとともに、その活用を図ることや、美術館などの作品や地域の文化財や文化的行事の中に、伝統美や美を生み出す技能などの価値を見だし表現に生かすなど多様な美的体験を図ることが重要である。これらをはじめ様々な体験の中から新しい発見やより効果的な表現方法の選択・活用がなされ、生徒一人一人の個性に合わせて創造活動が多様化したり深化したりするよう指導することが大切である^(注2)」と記されている。

また、鑑賞に関する解説では、「国際社会に生きる日本人として、日本の伝統的な美術の表現の特質を味わい、歴史の中で継承され変化してきた美術作品の様式や作者が追求している主題や表現内容などについての理解を深めるとともに、生活の中に生かされている伝統や日本の美的感覚に気付くことができるよう、指導する^(注3)」とも記されている。

日本の伝統的技法を理解するためには作品鑑賞や、技法製作過程等を映像資料等にて学ぶことも有効な方法ではあるが、実際の作品制作を通じてその特質や味わいを体験的に理解することがより有効であり、自らの制作体験と重ね合わせて作品鑑賞することで、鑑賞内容、感性の深化が期待できる。また、その体験的理解を通して、子供たちがわが国の伝統文化に一層の親しみと理解を持つことにもつながると考えられる。

2 作品の展示と生涯学習

文部省（現文部科学省）平成4年5月発行の高等学校芸術科美術、工芸指導資料「指導計画の作成と学習指導の工夫」の第1節第3章8項目には、生涯学習をふまえた鑑賞指導の工夫について以上のように記されている。

「これから自分はどのように生きていったらよいのか。」ということに目覚める青年期にあって、人間の在り方生き方への自覚を深めることができる優れた作品を鑑賞したり、友人の制作した作品に自己と異なる個性を強く感じ取ったりすることは、生徒の心の中で将来大きく萌芽して、生涯の充実した活動に大きくつながってくるものと考えられる。生涯学習という観点から、日常生活の中で美術、工芸に親しみ愛好する心情や態度を育てるために、生活と美術、工芸との関連性について、鑑賞の授業で十分に上げる必要がある。また、表現の授業と校内での作品展示計画、あるいは、学校行事・地域行事などと計画的に組み合わせて、鑑賞教育を授業時間だけに留まらず、学校環境を考慮した立体的な教育活動に広げることが重要である。生徒を取り巻く、日常における鑑賞の環境作りをどのように展開するか、どのように生徒自らの鑑賞意欲を旺盛にさせ、鑑賞を日常的で身近なもの意識づけるかが大切である^(注4)。」

そこで、参考作品の鑑賞、鑑賞内容に関連する作品制作、そして、学校行事（文化祭）における作品展示及び相互作品鑑賞、さらに自己作品を額装し自宅に持ち帰り、室内に飾ることで、日常生活の中で作品を活用していくといった内容の授業展開を考えた。

3 水墨画教材「模写から自己制作へ」—高校2年生—

(1) 題材設定

該当の高校2年生は、1年生時に「美術Ⅰ」2単位、2年生時にさらに「美術Ⅰ」を積み重ねとして1単位履修している生徒達である。授業実践において、鑑賞の内容で西洋の

美術と共に、東洋美術、日本の美術を取り扱ってきた。授業中の質問および応答、感想文等における反応として、東洋、日本の美術に関する興味・関心の強い生徒が意外に多いこと、絵手紙など和紙や日本画の材料を用いたものが話題を集めていることもあり、興味を持ちながらも、制作体験が無いことからなんとなく良くわからないという声が多く聞かれた。そこで、日本画や水墨画制作の内容で授業を行うことでその興味、関心を引き出すことで、熱心な創造活動や鑑賞活動の展開が期待出来るのではないかと考えた。

鑑賞、技法研究、模写、自由制作、展示、相互鑑賞、額装し、自宅に飾ることで作品を日常に活用することまでを行う授業を展開したいと考え、授業実践を行った。当初は顔料と膠を使った日本画制作の内容の授業展開を考えたが、顔料、膠、麻紙等多くの材料をそろえる必要があり、授業展開における限られた材料費用の面も考慮し、最終的には墨、水のみで描ける水墨画の制作を教材として選択した。

(2) 学習の目標

- ①水墨画の制作を通して東洋および日本の伝統的技法について理解することで、これらの鑑賞の際、主題や表現内容についての理解と興味・関心を深める。
- ②墨、和紙、などの材料および用具、水墨画技法について、基礎技法練習、模写を行うことで、描き方を学び、自己の日常の中から身近なテーマを探し、水墨画作品を制作する。その制作を通して材料技法、製作過程などを体験的に理解し、西洋絵画とは異なる東洋的な絵画表現を工夫した作品を制作する。
- ③授業で制作した作品を額装し、校内に展示し生徒同士互いの作品を批評しあったり、家庭に持ち帰り、飾ることで、個性の尊重や自己の良さを理解したり、美術作品が日常の中で生かされ、心豊かな生き方を実現するために役立っていることに気付かせる。

(3) 指導内容と留意点

①題材説明

教科書、画集、映像資料などを使用し、雪舟、長谷川等伯、曾我蕭白、狩野芳崖、横山大観、川合玉堂など様々な時代の水墨画を鑑賞し、それらがどのような材料技法を使って制作されているのか意見発表させて関心を高めさせた。

生徒達の水墨画作品に対する印象としては、「西洋絵画に比べて枯れた味わいや、渋みを感じる」「東洋風の味わいに落ち着いた風情があり、和室の空間に佇んでいるような静かな安らぎを感じる」等が授業中発表された意見として多かった。

しかし、その材料技法などに関しては、生徒のほぼ全員が描画材料として墨を使用した経験がないため、墨と紙、そして水を使って描かれているという意見が発表される程度で、材料や技法に関して興味はあるが良くわからないとの意見が大半であった。

そこで、黒板に和紙のパネルを置いて、実際ににじみ、ぼかし、かすれなどの技法を実演して見せた。初めて見る水、墨、和紙に描かれる形態に生徒たちは非常に興味を持ち、水墨による描画を早く自分も実際に試してみたいとの声が多くあがった。

技法への興味が高まったところで、墨の濃淡の調整（濃墨、中墨、淡墨）、様々な線、にじみ、ぼかし、かすれ等の技法の描き方と留意点を説明、理解させた。

題材説明の最後に、基礎技法の練習、模写による技法習得、各自自由なテーマによる水墨画作品制作、自由制作作品の額装と展示にいたるまでの本課題の授業展開のプロセスを

説明した。

②基礎技法練習

水墨画の表現について以下の四つの内容に分けて指導、技法練習を行った。

<線の太さ調整>

水墨技法の基礎内容として、筆の穂全体を使った太い線から筆の先端を使った細い線まで様々な太さの線を引き、自在に線の太さ調整が出来るようになるまで練習した。その際、繰り返し線を引かせる中で、一本の筆から微妙な力の入れ具合で様々な太さの描線が描けることを理解させると共に、同じ太さの描線でも線を引くスピードの違いで違った味わいの描線に様々な変化をとげることを理解するよう留意し、指導した。

<様々な形態の描線>

筆と墨を使って直線、点、回転する線、波線等直線以外の様々な描線を描く練習を行った。スムーズに、自在に描線および形態を描くためには、筆の持ち方、筆を持つ位置、線によっては軸を回転させながら描線を描く、動かす速度、はね・はらい等の際の筆の穂、穂先の扱い、描く姿勢等の点に留意して様々な工夫し、描くことで様々な効果の線および形態の表現ができることを理解するよう留意し、指導した。

<調墨>

墨と水の混合割合をさまざまに試し、濃墨、中墨、淡墨の三段階またはそれ以上の段階の濃度調整が出来るよう練習した。その際、筆洗の水を区切られた一区画ごとに、濃墨用、中墨用、淡墨用と分けて使用することで調墨がより調整しやすくなることを指導した。

<その他の水墨技法>

にじみ、ぼかし、かすれ等の技法を練習した。紙の湿り具合や水分量、墨の濃度、筆を動かす速度を様々に変えて試させることで、効果の多様な変化を体験させた。その技法が参考作品ではどの部分に使用され、それが画面上でどのような効果をもたらしているのかを、教科書、画集などの参考作品を観察しながら確認し、また、この効果を使って自分ならどのように作品に生かして制作したいのかについても考えさせた。

③模写

「川合玉堂の画手本・画手本解説」(美術年鑑社)を使用し模写を行う。「牛」、「亀」、「柿」、「栗」、「梅」、「小鳥」、「水仙」、「朝顔」等様々な画手本の中から自分の最も興味をおぼえる手本から順に選んで、絵手本解説を参考に描かせた。それまでに経験した水彩画の制作のように鉛筆で、下描きした上に墨で描いていこうとする生徒もいたが、下描きをなぞって墨で描くのではなく、手本を良く観察して直接墨で描き、なぞり描きや塗りなおし等は極力避け、一度で描くよう指導した。

④自由なテーマによる水墨作品制作

参考作品の鑑賞、基礎技法練習、模写を通してイメージし、習得した内容を、各自が自由に選んだ題材を、水墨で表現させた。その制作内容は、必要に応じて持参した参考資料およびモチーフを利用し描くもの、教室外の校内でスケッチするもの、互いにモデルになり描きあうものなど、興味関心により、様々な展開が見られた。何枚か描いた後、最終的な画面構成を決定したのち、色紙大の紙に清書として作品を描き完成とした。

⑤額装、展示、鑑賞

完成した水墨作品は学校行事の文化祭において展示した。展示内容を一般に公開すると共に、授業時間に展示作品の鑑賞を行い、クラスメート相互に作品を鑑賞批評し合い、そ

それぞれの作品の持つ主題、技法の活用、味わいや個性などについて作品を通した理解を深める事が出来る様授業を展開した。また、作品は額装し、各自家庭にて壁に飾るよう持ち帰らせた。後日生徒たちに作品はどのようにしているか尋ねると、自分の部屋や、リビングルーム、玄関などそれぞれ思い思いの場所に飾り、日常生活の中で活用しているようである。特に、各自作品を額装したときに、「作品がとても引き立つので驚いた」「ちょっとしたギャラリー作品のようになった」など自己作品や友人の作品が飾るにふさわしいかけがえのない美術作品として完成した喜びと驚きを口にしていたことが印象的であった。

(4) 完成作品

・図1

作者生徒愛用のバスケットボールシューズを描いた作品である。対象を良く観察し、手入れし、履き込んだシューズをてらい無く素直に表現している。中墨及び淡墨を用いて描いたキャンバスシューズの柔らかな質感と、濃墨による細い線のコントラストが味わいのある効果を出している。対象への愛着が伝わってくる作品に仕上がっている。

・図2

水墨画の制作ということで、日本の古典的なテーマを描いた作品である。作者生徒の名前の一文字である「貴」の文字から連想する日本の古典的な題材として、中世の貴族をテーマに選んだ。貴族の男性が月見及び花見をしながら、名月に一杯、咲き誇る桜に一杯と、杯を重ねる姿を描いている。月にかかる雲、草木、人物の影に使用したかすれの表現と濃淡による人物のシルエット、夜空、文字の対比が作品にリズムを加えている。

・図3

図2の作品と同じく水墨画の課題の制作に際して、日本的な主題を選んだものである。日本という言葉から、日本一を象徴する富士山を描いている。シンプルな構成であるが、富士を描く位置を工夫し、画面中心ではなく右下方に少しずらして描き、余白の効果を考えることで、画面に安定感と広がり、変化を生み出している。雲の表現をさらに工夫すれば、より効果的な空間表現が望める作品である。

・図4

描くテーマを何にするのか、かなり迷っていた生徒であるが、窓から外を何気なく眺めていた際、スズメがミミズをつついてる姿が印象的で、描く対象に選んだ作品である。スズメの大きさを様々に変え、構成を工夫したが、小鳥（スズメ）のかわいらしさを表現する為、画面に余白を大きく取り、小さなスズメを描き、画面右下に配置した。スズメとミミズの大きさのバランス、互いの位置関係にも留意しながらアイデアスケッチを繰り返し、最終的に本作品の画面構成仕上げたものである。

・図5

作者生徒の自宅玄関に飾ってある一対の木材工芸面をモチーフに描いた作品である。きびしい表情でいらんでいる面と、おどけた表情で笑っている一対の面である。毎日朝出かける時そして帰宅した時にこの面を見て、気がゆるんでいる自分をいましめ、また元気をなくしているときには笑って元気を出そうとする毎日の生活で親しんでいるものを描いた作品である。かすれた濃淡で全体のリズムを作り、中墨で面の立体感を表現している。二つの面の対比が印象的な作品である。

・図6

地面を歩く蟻を拡大し描いた作品である。作者生徒は幼い頃に読んだ童話の「ありとキリギリス」の内容から、蟻のようにコツコツとたゆまず努力を重ねるような生き方をしたいと考えているため、自分自身のモットーの象徴として蟻を描きたいと考えたものである。理科担当の生物教科の教員に蟻の姿形を確認し、それを元に地面に足を踏ん張りながら奮闘する蟻の姿を描いている。蟻の形を工夫し、動きのある形態に描かれているが、デフォルメすることによって、蟻を描いていることが一目ではわかりづらい表現になっていることが残念である。

・図7

作者は剣道部に所属する生徒である。幼い頃から剣道を習い、今後も剣の道を極めていくという自分の思いを描いている。正面、横、斜め等様々な角度から画面構成のアイデアを練った結果、防具と竹刀の特徴が効果的に表現される横の角度から描き、剣道の構えの安定感を表現するため、画面下方に人物及び竹刀を配置している。

・図8

作者生徒の好きな花である「ひまわり」を描いた作品である。花の中心を水分の少ない濃墨で筆を画面に垂直に軽くたたきながら描くことで、ひまわりの花の中心部分の質感の表現を工夫している。茎は単純な線で表現することで、主題である花を強調している。

・図9

作者生徒の夢を描いた作品である。太陽の光が燦燦と降り注ぐ川辺の草原で、春の日、桜の木の下で花見をしながら恋人と過ごす休日の様子を描いている。川の水を中墨及び淡墨で筆のストロークが残るように描き、揺れ動く川面と水の流れを描いている。また、太陽の光を濃墨から中墨の二段階の濃淡の変化で描き、春の陽気を表現しようとする工夫が見られる。また、画面が退屈なものにならぬ様、画面構成のバランスを考慮しながら鳥の群れ、草原に犬、川に魚を描いている。

・図10

タンポポを描いた作品である。踏まれても大地にしっかりと根を張り、花を咲かせ、風に乗せてその種子を飛ばすタンポポに、粘り強く、たくましく生き、社会に羽ばたいてゆきたいという自分自身の今後を重ね合わせてイメージし、描いている。実際に校庭にてタンポポを探し、写生をもとに描いたものである。葉の形状等に観察の成果があらわれているが、墨の濃淡、にじみ、ぼかし、かすれ等が単調な表現になっているのが残念である。校内でタンポポを探し歩いたり、葉の形状の観察スケッチ等に時間をかけたりしたためこのようになったが、さらに課題制作時間を十分にとって技法練習時間を十分に確保すればより深化した表現が期待できると思われる。

・図11

水墨によって日本の四季を表現した作品である。「春」「夏」「秋」「冬」をそれぞれ象徴する形態として、土筆、西瓜、とんぼ、雪だるまをデフォルメした。大空を飛ぶとんぼの羽の上部を画面からはみ出させることで空の広さを表現し、土筆は大地から生えている様を考慮し、画面下方に配置している。さらに画面全体のバランスを考慮しながら、西瓜、雪だるま及び「春」「夏」「秋」「冬」の文字を工夫して配置している。

・図12

水墨で宇宙と未知の生物（異星人）を表現したユニークな作品である。水墨画の参考作品の幽玄な世界に心惹かれ、また墨による表現に感じた無限の広がりから連想した、宇宙

空間をテーマに描いた作品である。主題である異星人に加えて描いた画面上方の彗星の形態がアクセントになっている。

(5) 教材のまとめ

一般的に生徒たちは日本画、水墨画になじみのないものが多く、なんとなく古臭く、とっつきにくい難解な美術分野であるとの印象を持っている。しかし、その反面何か渋く深い味わいや、心安らぐ奥深さのようなものに興味的一端を感じているという傾向も見受けられるものである。また、高校生くらいの年齢になると、よほど制作に自信のあるもの以外は、自己作品を家庭に持ち帰り、壁などに飾ることはしないようである。

しかし、授業課題として取り組む中で、墨と水と紙というシンプルな画材で描く水墨画のおもしろさ、例えば濃墨によるシャープな線や色面の持つ力強さや重量感、淡墨の淡い色合いで表現されるやわらかで奥行きと拡がりのある表現、にじみぼかしの技法で描く際、水を含んだ紙に墨で描いた後じわじわと時間経過と共ににじんで変化してゆく偶然性をはらんだ独特の表現のおもしろさ、かすれた線や面の持つ枯れた味わいや、スピード感など、これらを初めて制作体験する新鮮な美的体験に、筆者が予想した以上に生徒たちは非常に興味を持って熱心に、かつ主体的に取り組んで作品を制作したことは授業に際して印象的であった。

また、各自自由な主題の作品を制作する際、生徒たちの興味関心により、実に様々な主題の作品が制作された事も非常に興味深い結果であった。この後、関連する内容として、顔料を使った日本画の内容の授業展開を実施したかったが、カリキュラム、授業時間数、教材予算などの関係で断念せざるを得なかったことが残念である。

完成作品は生徒たちそれぞれの個性や持ち味を反映した作品が仕上がりに、額装した自己作品の出来ばえに満足し、自宅に飾るために喜んで持ち帰っているようであった。一般的にデッサン、水彩画、油彩画、アクリル画等の制作においては写実的な描写力が作品の出来ばえに大きく関わってくるものである。水墨画においても、もちろん同様の要素はあるが、大胆なデフォルメや、正確なデッサンで細密に写実的に描くことが困難で、モチーフの扱いが平面的な作品であっても、それがひとつの味わいとして画面に効果的に描くことができ、これまで経験してきた美術の制作と違ったおもしろさを味わうことができたのではないかと考察される。

そして、水墨制作後の鑑賞内容の授業においては、心のどこかで興味がありながらも、なかなか触れる機会が無いため、日本画や水墨画に理解が困難であった生徒たちもその制作体験をきっかけに鑑賞の内容が深化し、東洋、わが国の美術に興味関心を持つきっかけにもなったようである。美術を通じた生涯教育のきっかけになればよいと考えている。

以上の観点から、水墨画の教材は高等学校美術科の授業において、効果的な教材といえる。本授業実践においては水墨による表現の基礎基本あるいは入門的な内容の制作であったが、今後さらにその展開を考察し、より深化、発展した作品制作や鑑賞活動の授業展開を工夫していきたいと考えている。

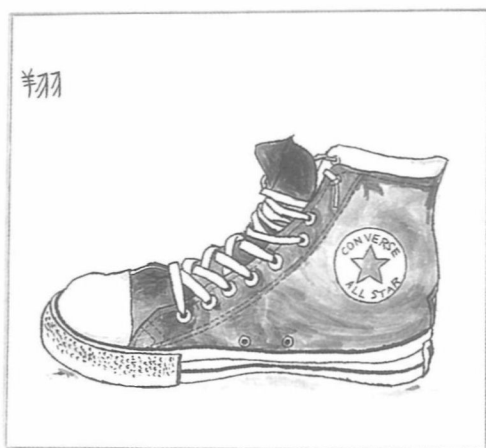


图 1

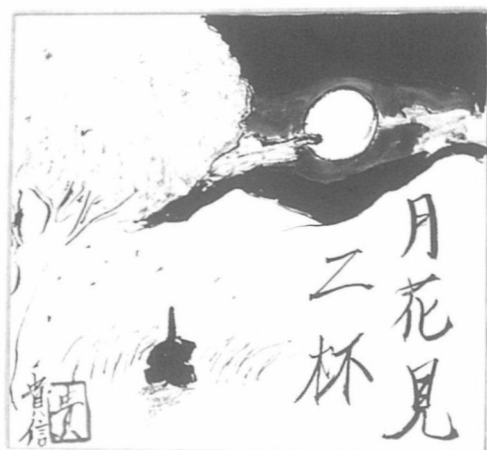


图 2

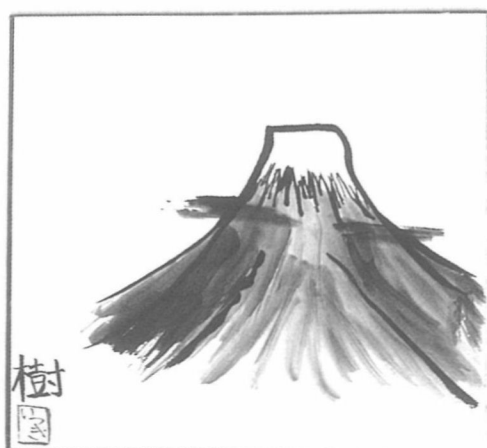


图 3

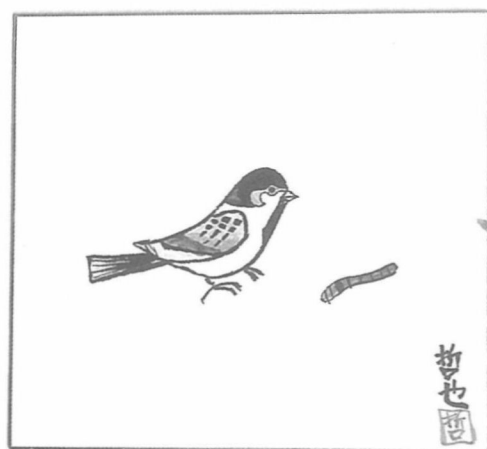


图 4

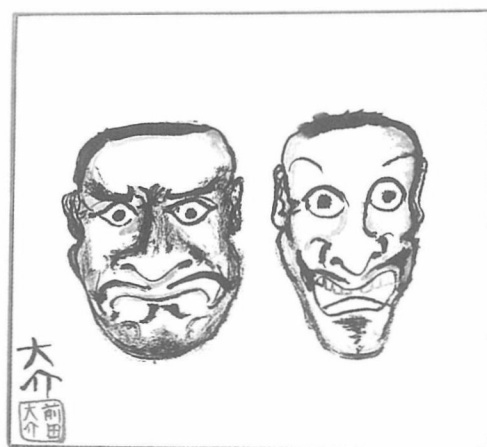


图 5

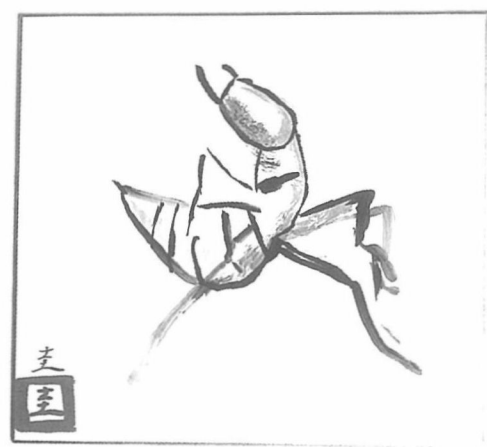


图 6

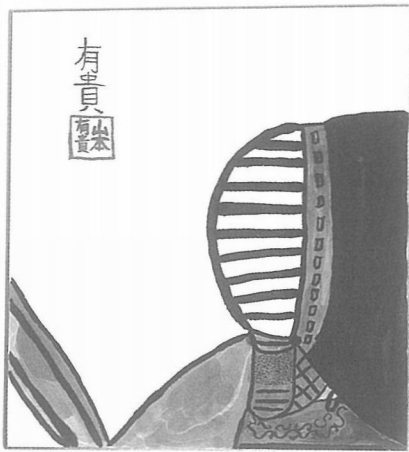


图 7



图 8



图 9

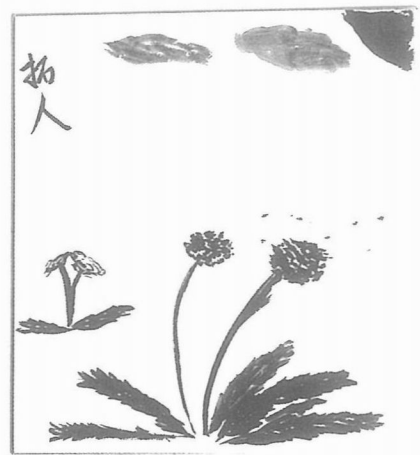


图 10

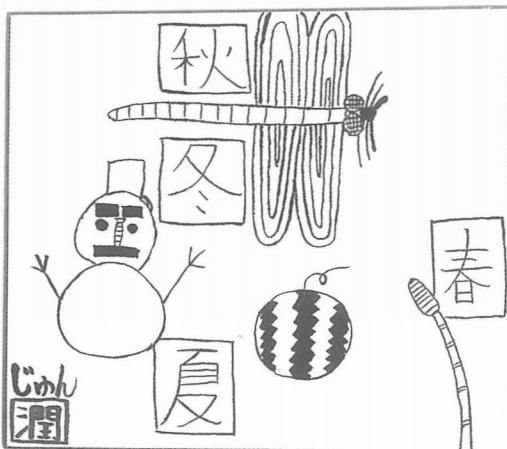


图 11

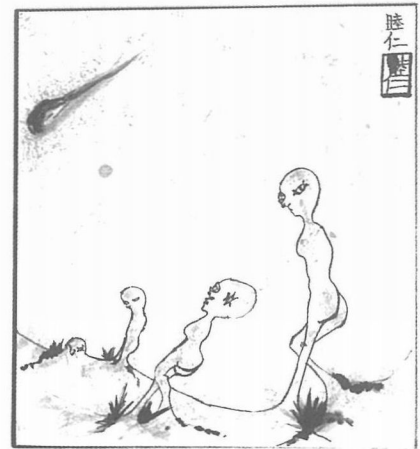


图 12

注

- 1 文部省「高等学校指導要領解説」教育文芸社1999 P.2
- 2 前掲書1 P.76
- 3 前掲書1 P.89
- 4 文部省高等学校芸術科美術,工芸指導資料「指導計画の作成と学習指導の工夫」東洋館出版社1992 P.75-76

参考文献

「川合玉堂の画手本・絵手本解説」1994 美術年鑑社

文部省「高等学校指導要領解説」教育文芸社 1999

文部省高等学校芸術科美術,工芸指導資料「指導計画の作成と学習指導の工夫」東洋館出版社 1992